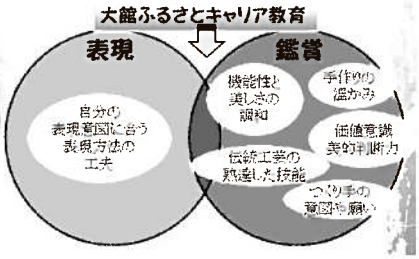
人がつくる　技を極める
ふるさとの匠に学ぶ大館曲げわっぱ

大館市立田代中学校　教諭　**成田　麻衣**

1　構想

子どもからも大人からも聞こえてくる「大館は何もない」というつぶやき。たくさん魅力的なものがあるが気付いていないだけで、美術の授業を通して、自分が育った大館の美しいもの、大切なもの、誇れるものを見つけてほしいと考えた。

図のように、美術では表現と鑑賞の二つの分野を学習する。それに大館ふるさとキャリア教育を取り入れて、ふるさとを見つめ直して大切なものを探したり、伝統工芸品を実際に使ってよさを実感したり、伝統文化や手仕事にこめる思いを知ることがふるさと大館への愛着と誇りにつながると考えた。



2　実践

(1) 私のふるさと写真展

表現の分野において、自分のふるさとへの思いを写真で表現する「私のふるさと写真展」を行った。「自分にとってのふるさととは何か？」というテーマで、生徒が構図や被写体、時間などの表現を工夫し写真を撮り、展示した。どの写真にも生徒の思いがあふれており、思いが伝わる写真展となった。

(2) 大館曲げわっぱの鑑賞

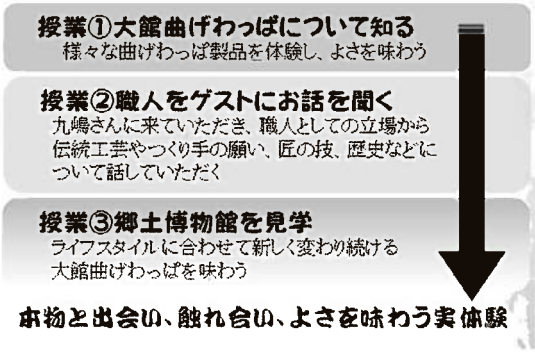
大館曲げわっぱは教科書に載っているものの、子どもたちは日常生活で触れる機会が少なく、なじみがない。ふるさとが誇る大館曲げわっぱを鑑賞し、工芸品のよさや美しさを感じさせようと考えた。

①教材・素材集めと構想

授業の実践にあたり、大館にあるものを教材として生かそうと考えた。郷土博物館の曲げわっぱ展示室には、普段見ることのない新しいデザインの製品がたくさんあり、生活に合わせて新しいデザインが生み出されていることがわかる。また、大館曲げわっぱ体験工房では、伝統工芸士の佐々木さんから、たくさんの独創的な作品をお借りすることができた。さらに、学校のすぐ近くには伝統工芸士でもある大館曲げわっぱ職人の九嶋さんの工房があり、ゲストティーチャーとして職人の立場からお話していただくことができた。

これらの教材や人材を生かして、伝統工芸として受け継がれている根本的なよさや、生活に合わせて変化し続けているなどの大

館曲げわっぱの魅力を生徒に伝えようと、授業を右図のように三段階で構想した。



②授業実践１［大館曲げわっぱについて知る］

形の美しさや素材の特性などのよさを味わい、また大館曲げわっぱに自分なりの価値を見出すことを目標に授業を実践した。知識ではなく、製品を実際に使う体験を通して、なめらかさや軽さ，木のあたたかみ，口触り，保湿性，香りなどのよさを実感させることに留意し、さまざまな製品を用意した。そのなかで生徒は、木のよさや曲げわっぱの雰囲気、「和」のよさなどを感じ、味わっていた。

③授業実践２［職人をゲストにお話を聞く］

学校の近くに住む大館曲げわっぱ職人の九嶋さんに来ていただき、職人としての立場から生徒にお話をしていただいた。内容は、曲げわっぱの成り立ちやデザインのよさ、手作りのよさや作り手としての伝統工芸への思いなどである。九嶋さんには、自分の作品や受賞した最新作、木を切り出す昔の技術の図解なども用意していただいた。また、匠の技も実演していただき、生徒はひきこまれ、目を輝かせながらお話を聞いていた。

【生徒の感想より】

曲げわっぱは知っていたが使ったことがなく、なじみがなかった。でも、よく知ることができて今は身近に感じる。

歴史を感じた。大館の人たちが曲げわっぱを大切にしてきたんだと感じた。

自分の曲げわっぱがほしいです。

３　成果と課題

大館曲げわっぱを扱う中で、生活の中の美しさ「用の美」を感じさせることができた。また、地域の人材を活用することで、子どもたちもゲストも親近感をもって触れ合うことができた。

今後の課題として「大館曲げわっぱはいいもの」という価値を押しつけない授業展開をする。「地元の物だからいい」ではなく、工芸品としての美しさをもっと感じさせる。また、よりねらいにせまるようなまとめをし、伝統工芸とふるさと大館、両方への価値をつくりだせるようにしたい。そして、本物の職人とのふれあいを通して、「働く」「好きなものを追求する」という姿勢に学ばせたいと思う。